

聖地のこどもニュース オリーブの木

No. 19 2006年5月



エルサレム：「平和」について話しあったテラサント女子学院高校生と、日本人高校生および同行スタッフ

支援者の皆様、今号の「オリーブの木」はこの春実施した《平和を願う対話の旅》特集号となりました。勇気をもって参加してくれた3人の高校生、団長の中村満師、また同行スタッフ一同にとって、豊かな収穫のあった旅でした。昨年プロジェクトで来日した高校生や大人との再会、新たな人々との感動的な出会い、ふれあい、対話がありました。また「分離の壁」や難民キャンプなどの厳しい現実を体験した若者たちは、ますます平和への思いを深くし、自分の周りの人々への「報告会」など、できることから具体的な活動を始めたいと強く望んでいます。またイスラエル・パレスチナの若者たちとのさらなる協力体制も確立していくことにしています。若者の心に芽生えたこの望みを温かく見守り、今後ともご支援くださいますよう、心からお願い申し上げます。 理事長 井上 弘子 スタッフ一同

NPO 法人 聖地のこどもを支える会

事務局：☎ 164-0013 東京都中野区弥生町 1-19-1-201
Tel & Fax : 03-3379-5571 e-mail : seichi@k.email.ne.jp
ホームページ : <http://www.ne.jp/asahi/seichi-no-kodomo/org>
郵便振替 : 00180-4-88173

イスラエル・パレスチナを訪れて

《平和を願う対話の旅》団長 中村 満神父（長崎教区司祭）

今回の旅の感想や実りをまとめるのは少々難しい。約2週間に及ぶ体験は、あまりに刺激が強く、冷静に整理するには時間がかかりそうだ。しかも語学の壁で、当事者の真意を正確に理解できなかった。詳細は他の人に譲るとして、旅の主なテーマ、再会・交流・対話・体験に沿って短く書いてみたい。

再会：その喜び テルアビブの空港に降り立った私たちを迎えてくれたのは、昨夏訪日した高校生と大人数人、ホームステイ予定先の家族と子どもたち。皆抱き合って再会の喜びを表し、しばらく談笑した後、迎えるバスに乗り込んだ。旅の始まりから再会の喜びは大きく、期間中には訪日高校生とその両親等にも会うことができ、参加者は皆、歓迎と再会に大きな喜びと励ましを得た。再会できただけでも、旅の目的は十分果たされたと言えよう。約1万キロも離れた地から知人が訪ねてくることは、相手にとっても大きな喜びであっただろう。

交流：幼児から大人まで 交流プログラムに盛り込まれていた各学校・施設の訪問、ホームステイ、遺族の会の体験談、高校生・両親との集いにも大きな刺激を受けた。現地の状況を知るには、直接現地在住者と交流し、その話を聞き、在住地を見るにこしたことはない。特に、自宅に迎えてくれた訪日高校生の各両親に感謝したい気持ちでいっぱいだった。イスラエル・パレスチナ両地の生活の実態や状況を肌で体験することができ、両者の様子を知ることができた。参加高校生たちにとっては、学校・施設訪問での幼児・小・中・高校生との触れ合いは、貴重な体験となっただろう。年下だけでなく、同世代の学生と接し、対話することで様々な刺激を受けたに違いない。

対話：平和の道しるべ 「交流と対話の一日」のプログラムが3回組まれていた。訪日した高校生と大人をはじめ、現地で迎えてくれた両親、ホームステイ家族との交流と対話は、何にもまして貴重な体験となったと思う。紛争の地に実際に住む人々と平和をテーマに対話することなど、日本人にとってはほとんど不可能である。これまで何人体験した方々がいるだろうか。それを今回の旅で実現できたことは、この上ない実りだったといえる。語学に弱い私は、互いに深く語り合うことはできなかったが、参加者の様子から、このプログラムの重要さ、貴重さは十分読み取ることができた。3カ国の学生たちを見ながら、学生時代にこのような体験ができることは、なんと素晴らしいことかと羨ましく思った。武力ではなく、対話による和解の道を歩むには、若い世代から相互の対話と交流に努めることが確かに重要である。それがなければ、相互理解も和解も始まらないだろう。

体験：時を超えて 旅のすべてが貴重な体験であったが、中でも平和をテーマに聖書の世界から現代までを体験できたことも、この旅の実りだったと思う。鉄器時代の遺跡、死海周辺の荒野、イエス時代の遺跡、マサダ、ヤド・ヴァシェム（ユダヤ人6百万人の犠牲者の記念館）、ゴラン高原など、数千年の歴史と人間の営みを体験することができた。長い歴史の中に見え隠れする人間の在りようを平和の視点で考えることは、とても有意義であった。私にとって驚きだったのは、至福の丘教会の正面入口を入った時、真正面の聖句が「平和のために働く人は幸い……」という句であったことだった。聖地巡礼で旅することはあっても、平和の視点で聖地を訪れることはそうない。その意味でも今回の旅は特別なものであったといえる。

おわりに 旅の実現のためにかかわってくださったすべての方々はもちろん、聖地で私たちを受け入れてくださったすべての方々にも心から感謝したい。これまでに体験したことのない貴重で、有意義な旅であった。

平和が即座に実現することはありえないが、平和のために働く人を育てる目的は十分に果たせたと思う。このような取り組みが今後も続けられることを心から願っている。

最後になりましたが、同行してくださった皆さん、お世話になりました、本当にありがとうございました。



イスラエル・
パレスチナを旅して
私の平和への

思 い
石黒 朝香

イスラエル・パレスチナを訪れることは、私の長い間の夢でした。その機会を与えてくださったことを、本当に感謝いたします。昨年8月以来友だちになった高校生が住んでいるこの土地は、三大宗教の聖地であり、本当に不思議な世界で、日本にいては決して感じられない魅力があります。私の心に強く残っていることは、予想した以上に美しかったということ、そしてその裏側で必死に生きている人々の姿でした。

テルアビブ空港からエルサレムに向かうバスの車窓から、ごつごつとした岩が転っているいくつも連なる丘やオリーブ畑が広がる世界を目にしました。日本だったら、誰もが殺伐としていると感じるでしょうが、乾燥している空気と独特の雰囲気、その景色を美しいものに変えていました。そして旅の間、どこに行ってもそのような広々とした世界を見ることができました。その度に目を奪われ、感動し、写真を撮り、また感動し、という連続でした。

私は街の中心部から少し離れたところにある、東エルサレムのテディの家にホームステイをしました。テディの家は5人家族で、ご両親のほかにお姉さん・お兄さんがいます。とても仲が良い家族で、それぞれの生活を送っているけれど、しっかりと支えあっているという印象を受けました。その一方で、テディの家から100mほど離れたところには、イスラエル軍による検問所があります。そしてその検問所から逃げていくパレスチナ人を捕らえるために、その近くの道は土囊によって閉鎖されています。さらに家の反対側にはイスラエル人のための居住区があり、パレスチナ人が住んでいる区域との間にフェンスが設けられています（分離の壁とは違います）。日本の私たちの生活とは全くかけ離れています。行動に制約を受けながらの生活など、日本はおろか、他の大部分の国にはありえません。本当に生活の身近な場所に、紛争による被害があるのだということを実感し、とてもつらくなりました。ホームステイの間に、テディのお兄さんが検問所で1時間以上待たされた日がありました。「いつものことだ」と言っていました、そのようなことが起こる度に不安になっているのではないかと思います。厳しい状況の中で、家族の絆がどれだけ大切であるか、ということが際立って見えたように思いました。

街を歩いていて日本と明らかに違うことは、イスラエル兵士の存在です。兵士はさまざまなところで銃を持って巡回しています。男性だけではなく女性の兵士もいます。初めて見たときには、顔がこわばるほど緊張しました。自分の視線が自動的に兵士の顔から銃へと移っていきます。あの銃をいつ使うのかなどと、恐ろしい想像もしてしまいました。分離の壁を見たときも、同様に大きな衝撃を受けました。無機的で、ただのコンクリートの塊であるはずなのに、これが人々を隔て、心理的にも恐怖や相手方を疑う心を持たせてしまうのだと感じ、壁の建設をどうにかして中止してほしいという心境になりました。

旅が進むうちに、イスラエル人とパレスチナ人の間の心の壁も感じとるようになりました。お互いが相手方に対して抱えている恐怖がだんだんと伝わってきて、私自身もその恐怖を体感し、第三者である日本人がいくら「イスラエル人はいい人だ」「パレスチナ人はいい人だ」などと説得しても効果は得られないような、心の奥底にある隔たりを感じました。社会全体が恐怖感と不信感を人々に与えているように感じられました。私でさえ、「これをしてたらイ



石黒 朝香
昨夏のプロジェットの時は
高校3年だったが
現在大学1年生（東京）

スラエル人を怒らせるだろうか」「パレスチナ人を怒らせるだろうか」と、一つ一つの行動に注意を払うようになりました。

紛争の原因として、お互いに理解しようとする努力が足りない部分もあるかと思います。昨年の夏に日本に来たパレスチナ人のヤクーブが、私たちと共にヤド・ヴァシム（ユダヤ人のホロコーストを記念する資料館）を訪れたとき、「ホロコーストの悲惨さを初めて知った」と言いました。虐殺の事実は知っていましたが、どれだけ残酷であったか、どれだけユダヤ人が苦しんだか、ということを含く知らなかったのです。すぐ隣りに住んでいる人の歴史を学んでいないのに、相手を理解することは非常に難しいと言えます。イスラエル側でも、パレスチナ側の歴史をあまり勉強する機会はないようです。無知は恐怖を生み出します。日本と中国の関係について考えてみると、日本人も第二次世界大戦中に中国人に対して行ったひどい虐殺の話を、学校の授業であまり深く扱っていません。しかし友好関係を築いていくためには、自国がしたことを正確に認識しな



ければなりません。同様に、イスラエル・パレスチナの人々も、相手がどんな歴史を持ち、自国が相手に何をしてきたかということを、しっかりと見つめる必要があると思いました。

日本では体験できないたくさんのかを学びました。また同時に、私たちがどれだけちっぽけであり、無力であるかということも痛感させられました。旅が始まる前には、旅の間に私たちにできることが見つかるだろうと、安易に考えていました。

ところが旅を終えてみると、見つかるどころか、パレスチナ問題の複雑さを今まで以上に知ることになり、結局私たちにできることなんて、何もないような気持ちにさえなりました。しかし、私たちにできることは平和を願う輪を広げていくことだと思っています。今築かれかけている平和の輪をなんとかしてでも守り、機会をみてどんどん広げていかなければならない、そういう決心もつけることができた旅でした。

大変な状況の中で生きている彼らですが、心は本当に優しい人々です。ホームステイに行けば、「自分の家のようにくつろぎなさい」「いつでも帰ってきなさい」、街を歩けば（日本語で）「こんにちは」「いらっしゃいませ」と、出会う人それぞれのもてなし方で私たちを歓迎してくれました。そしてそのすべての人から温かみを感じました。恐ろしいこともしばしば起きますが、世界が危険だと警戒しているイスラエル・パレスチナには、私たちと同じような（もしくはそれ以上に素敵な）心を持つ人々が生きています。

ベツレヘムの商工会議所長が言っていた言葉が心に残っています。「心の温かく、真面目に仕事をする《テロリスト》（パレスチナ人）もいるんだ。日本に帰ってそのことを伝えてくれ」と。

旅の間には気づけなかったのですが、このプロジェクトに参加し、イスラエル・パレスチナの高校生と交流するようになってから、自分に自信が持てるようになったように思います。それまでは、自分が日本人であることがコンプレックスのように感じることもあり、あれもこれもと気が多く、周りに振り回されてばかりいました。しかし彼らと出会い、私自身を表現することの大切さを知りました。「日本人」という安全な枠に無条件に守られているという恵まれた環境も認識するようになりました。外の世界を見ることは、同時に自己を振り返ることです。彼らが必死に生きている姿を見て、これからどのような世界を築いていくかをともに考えることで、私自身も日本人としての生き方を真剣に考え始めたように思います。

今回の経験を活かし、今後もイスラエル・パレスチナ和平のために日本人として出来ることを、私なりに必死に行っていきたいと思います。本当にありがとうございました。

私は、今回イスラエル・パレスチナを訪問するにあたって、現地の人々の表情をしっかりと見るように心がけてこの旅に参加しました。

私は現地に着くまでの飛行機の中でも、あの地は本当に安全なのか、テロに巻き込まれないだろうかと不安を感じていました。友だちが現住んでいるのだからきっと大丈夫！と思う反面、メディアを通して見イスラエル・パレスチナを考えれば「危険！」ということが頭に浮かんでしまっていたからだと思います。しかし空港まで歓迎に来てくれた懐かしい友だち、そして新しく出会う友だちや家族が笑顔で私たちを出迎えてくれたので、とても落ち着き、安心しました。

この旅で一番私の心に残っていることはホームステイです。私がパレスチナ側でホームステイをした家族は今回初めて出会った人々で、ベツレヘムにとっても近いアラブ人の町ベイトジャラに住む家族でした。家に着いて目を疑ったのは、この家族が所有する広々としたオリーブ畑に横たわる分離の壁でした。高い壁の向こうのオリーブの木がたわわに実をつけても、ただ腐るのを黙って見ていなければならないという状況です。このような中で、この分離の壁があるからといって屈せずに、この現状、そして苦しみを誰かに聞いてほしい！知ってほしい！と訴える、ホストファミリーの一人ひとりの必死な顔を今でも忘れることができません。なぜ幸せに暮らしている友だちを傷つけるのかと、とても苛立ちを感じました。

ベイトジャラでのホームステイは2日間予定されていましたが、イスラエルの総選挙でイスラエル軍がテロを警戒してこの町を包囲し、出られなくなるかもしれないということで、私は急遽、エルサレムの旧市街に住むヤクブの家に移ることになりました。急なことだったので、滞在先の家族に、涙ながらに "Stay with us !" と言われた時、私も涙をこらえることができず、泣いてしまいました。この時、私はホストファミリーとの別れが辛いと感じたと同時に、この国の現状を自分で体験し、とても動揺してしまったのです。このような出来事が、この国では当たり前のように繰り返されている……こう考えると、言葉よりも先に涙が出てきて、とても悔しく感じました。

ヤクブの家では、急な滞在にもかかわらず、家族みんなで私を歓迎してくれました。滞在中に、



滝川 理紗
長崎：高校3年

「私たちの家はとても小さい。でも私たち家族はとても仲良く幸せに暮らしている。家族が何よりも一番大切なの」とヤクブのお母さんに教えてもらいました。彼らはこの国で自由がなく、とてもつらい思いをたくさんしているはずなのに、それぞれの家庭を訪問すると、とても温かく幸せな気持ちになれました。それでこの地の紛争の問題を考えるときには、国家間、宗教間の関係を考えるのと同時に、現地に住む一人ひとりがどのような思いで生活を送り、そして彼ら一人ひとりにとっての幸せとは何かということを深く考えなければならないと思うようになりました。

ところで、初めてこの街を歩いたときは、銃を持ったイスラエル兵を見るたびに、私の中に「撃たれたらどうしよう、怖い」と恐怖を覚えました。しかし日を重ねるうちに、兵士を見ても何も感じなくなり、これが普通なのだと思います。私でさえこうなら、ましてイスラエルやパレスチナの人々にとっては銃を持っている兵士を見るのが当たり前で、ほとんどの人が何も感じていないに違いないありません。だから私は、現地の人々に、自分たちの生活がどれほど普通でないかを、もっと気づいてほしいと思いました。

この国の人々との新しい出会いも、この旅での大きな収穫だと思います。のんびりと時間が過ぎていく街で、初めて出会うのに笑顔で話しかけてくれた人々、写真を撮って良いかと尋ねると笑顔で答え

イスラエル・パレスチナでの
私の体験
**友の笑顔の奥に地に
苦しみが……た** イ
滝川 理紗

てくれた子供たち。日本人から見たら「とても危険な国で、たくさんの傷を負った人々が住んでいるはずの国」で、私は多くの笑顔の人々に出会いました。しかしそんな中で、1シェケルを求めて叫んでいるおじいさん、食べ物求めて手を差しだしている母子、そして難民キャンプなどで、どうしてもなく不自由な貧しい生活を送っている人々など……笑顔の裏には、私たちにはわかりえない、言葉にできないほどの悲しみやつらさがあるはずです。

私はこの旅で体験したこと、夏に会った友だちとの再会、たくさんの新しい人々との出会い、彼らの生活スタイル、街の様子（たくさんの兵隊、チェックポイント、分離の壁など）を身近な人々に伝えたいと思います。彼らの国というよりも現地に住む人々がおかれている現状をできるだけ多くの人々に知ってもらい、考えるきっかけにしてほしいからです。私は、現地に住む一人ひとりがとても親切で温かい人々だと感じました。だからこそ、互いの考え方を尊重しあいながら、「対話」をすることがもっとも大切なのだと実感しました。私は、もっと現地の人々が互いに話し、信じようとする気持ちを持てるような環境を作るためにはどうすればよいのか、そして彼らの笑顔の奥にある苦しみをさらに深く理解するにはどうすればよいのか、勉強を続けていきたいと思っています。

★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆

聖地イスラエル・パレスチナの地を離れてから早くも1カ月以上がたちました。わずか16歳とちょっとでこんなにもすごい経験をしたことは、必ず私の人生の大きな糧となり実りになると思います。この旅で私はたくさんの人と出会い、たくさんの場所を訪れ、たくさんのことを学ぶことができました。とくに聖地で分かった二つのことをお話したいと思います。

聖地を訪れて
学んだこと
緒形 葉子



緒形 葉子
広島：高校2年

一つ目は、人類は偉大な力を持っている、ということです。マサダをはじめ、数多くの遺跡を訪ねましたが、どの遺跡を見ても何百年、あるいは何千年昔の人がつくったとは思えないほど立派なものばかりでした。繊細なレリーフや工夫とアイディアに満ちたお風呂とサウナ、クレーンもない時代にどのように築いたのか、見事な大きく太い柱、気が遠くなるほど時間を要したにちがいないモザイクの数々……。そんな芸術作品に触れるたび、私は人類の持つ力のすごさを実感しました。人間の手でこんなものをつくることができるなんて……と何度思ったでしょう。しかし長い人類の歴史の中で、私たちはたびたびその力を間違った方へと使ってしまいます。

ホロコーストの記念館を訪れることができたのも、大きな実りの一つでした。広島の平和資料館よりもさらにインパクトの強い数多くの写真が、私たちを圧倒しました。見かけはまったく変わらない人間が、「ユダヤ人であるか、そうでないか」という小さな違いで2つに分けられ、そうでない人はそうである人を殺し、そうである人はそうでない人に殺される……。衝撃的でした。ショックでした。何度も目をそらしたかった。広島の資料館を初めて訪れる人はみんな、こんな気持ちなんだ……と身をもって実感しました。私の学校がある広島市は、二つの大きな力でできていると、私は思います。一つは60年前、街を黒こげにし、人々を焼き、建物の全てを破壊した力です。これは「間違った力」です。愚かで恐ろしくて何も与えてくれない、悲しみと怒りだけが残る大きな力です。もう一つは「希望の力」です。

去年の夏、聖地からやってきた高校生たちを驚かせた再生の力です。今、広島は60年前の悲劇を感じさせないほど、大きく発展しました。大きなビルが建ち並び、たくさんの方が道を行き交い、多くの車が通り過ぎていきます。学校の窓からビル群を見た時、フラワーフェスティバルで人の波に負けそうになる時、本通りで友だちと買い物をする時、私はこの街に潜んでいる「希望の力」をたたくにはいられません。

二つ目に感じたことは、人はみんな闘いながら生きているということです。闘っている「何か」は、もちろん人によって違います。過去から引きずっているものと闘う人、現在目に見えるものと闘う人、未来から来るプレッシャーと闘う人、時間と闘う人、怪我や見えない傷と闘う人、自分の出生と闘う人、性差別と闘う人……挙げるときりがないほど、その様子はさまざまです。だからこそ、自分だけが苦しんでいると思うのは間違いだと気づきました。自分も周りの人も苦しんでつらいときには助け合うことが必要だと強く感じました。人と人との繋がりが薄れてきた最近の世の中だからこそ、「困ったときはお互い様」という広い心で、お互いを受け入れ合うことが、平和をつくる第一歩だと思いました。

最後になりましたが、去年の夏からプロジェクト全体をまとめてくださった井上さん、今回の旅でいろいろと助けてくださった団長の中村神父様、この旅にかかわってくださったすべての人たちに感謝したいと思います。最年少だった私をどんな時もサポートしていただき、感謝の気持ちでいっぱいです。そして「一緒に風呂にまで入った仲」となった朝香と理紗。2人のこと、本当のお姉ちゃんと思っとるけえ、これからもよろしく！ この旅で得たものは一生の宝物です。ありがとうございました。

シャローム&サラーム！！



平和の 巡礼者として

Br. 新 直己
同行スタッフ

今回の旅で私が強く感じたことは、パレスチナとイスラエルの人々が置かれている環境と日本人のそれとの大きな違いと、自分の無力さです。「違い」というのは、現地滞在中、ほとんど毎日のように人々に出会い、話を聞く機会があったわけですが、彼らが置かれている状況を知らなければ知るほど、彼らとの溝が次第に大きくなっていくように感じていました。そして、日ごろいかに私が安全で、問題のない生活、何不自由ない生活をしているかを痛感させられました。

「自分の無力さ」というのは、旅行中は司会や一部通訳も頼まれたのですが、司会をしてみても思うように進行させていくこともできず、他の人がフォローに入ってくれる場面もありましたし、通訳をしても話の内容がよく理解できず、何度か詰まってしまうことがありました。考えてみると英語の理解にしても、その場その場の雰囲気的なものしか把握していないことが多く、きちんとした言葉の置き換え、意味の把握ができていなかったように思います。それは日本語の会話でも、そのような傾向があるかもしれません。また力不足は、他のところでも感じました。今回の旅で、去年日本で出会った多くの人に再会したわけですが、再会の場面ではうれしさよりも、戸惑いを感じ、どことなくぎこちないものとなってしまいました。他の日本人の参加者は、あれほどまでに再会を喜び、積極的



Br. 新 直己
フランススコ会修道士
同行スタッフ

に話の輪の中に入っていけるのに、私はどこか傍観者のような感じがしました。最後までそのような思いは消えませんでした。テルアビブでの最後の夜は、なぜか無力感でいっぱいでした。夕食後少し散歩に出ることにしましたが、イスラエルの、そしてテルアビブでの最後の夜は寂しいものでした。次第に雨が降り出し、傘を持っていなかったので帰るころにはすっかり濡れてしまいました。

そのような思いで帰ってきた私でしたが、イスラエルでこのような体験をしたことは、私にとって良かったと思うようになりました。

この旅での経験が決して無意味ではないことにも気づかされます。わからないなりに、距離を感じながらも、この旅を通して、多くのすばらしい人々に出会い、多くのすばらしい経験をしたことも事実です。イスラエルやパレスチナの人々の苦しみや痛み、恐怖といったものを、同じ状況に住んでいるわけではないので、理解できないのは当然かもしれません。人間は同じような状況に置かれないと、相手に対して共感を示すことはできないでしょう。この距離感や、無力感、もどかしい思いなどは、私のこれからの課題にすることができるとも思います。彼らとの距離を感じているのなら、むしろこれからこの距離を縮めていくことも、理解しようとしていくことも可能です。それはパレスチナやイスラエルの人々を理解することだけに限らず、私の身近にいる人々を理解し、共感していくために必要となるものです。

私がイスラエル、パレスチナに行ったのは、実は17年ぶりのことでした。2年半もの間いたイスラエルという土地は、いつも私にとっては魅力的な土地でした。帰国した後も、心のどこかで「帰りたい」という気持ちがありましたので、今回思いがけない機会が訪れ、再び地を踏むことができたのはラッキーでした。もちろん、この何年かの間に変わったこともありました。たとえば以前は分離の壁もなかったし、高速道路もそれほど整備されていませんでした。しかしベングリオン空港に降り立ったときから、以前と同じ時間の流れ、日本との空気の違いを感じ、非常に懐かしい思いがしました。旅の途中で何度も日本には帰りたくないという思いが湧いてきました。

今回の旅で何を得心することができたかはわかりませんが、私にとっての最大の収穫は、去年のプロジェクトの参加者であったヨルダン国籍のパレスチナ人、ヤクブ・ガッザウィ君が、エルサレムから私たちの旅に同行してくれたことでした。年齢差のある彼と同行中ずっと部屋をシェアしたので、以前よりも親しくなることができて、よかったです。おそらく彼は、はるばる日本から友だちが訪ねて来たから、一緒に何日か過ごしたいと軽い気持ちでいたのでしょう。彼にとって単なる楽しい遠足の延長のようなものになるだろうと、私も始めは考えていたのですが、一緒に旅を始めてみると、それほど気軽な旅ではないことがわかりました。私たち日本人旅行者と一緒に来たことによって、彼にはいくつかの気づきが与えられたと思います。それは良い学びでもありました。いろいろな意味で、彼にとってもこの旅が忘れられないものとなったことを望みます。

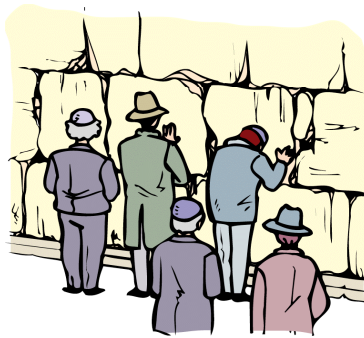
エルサレム旧市街のユダヤ人地区や、ユダヤ教の聖地である西の壁に行ったとき、彼はどこか気が進まないようでした。西の壁に入るときのチェックには、少しおびえていたようです。一番衝撃的だったのは、エルサレムを発って死海を目指す予定だった日、先ず朝のうちにエルサレムのヤド・ヴァシェム（ホロコースト記念館）へ行ったことです。本人はそれを知らないようだったので、そのことを告げたところ、戸惑っていたようでした。しかし、いったん記念館に入ると、彼は一生懸命メモを取り始め、あるところでは「もう行くよ」と言っ



でも、なかなかメモを取る手を休めようとしませんでした。後で聞くと、驚きだったのですが、ホロコーストのことは知らなかったということです。日本にいる私たちでもいくらかのことは知っているのに、イスラエルという国の隣人でありながら、パレスチナ人として生まれ育ってきたために、そんな話は聞いたことがなかったのでしょう。ユダヤ人というのは悪い人間だと教えられているだけで、ユダヤ人の別の面を知る機会にはなかったようです。あらためて教育の大切さを感じました。もっとも、どこかの国の社会科の教科書が、近隣の国から批判されるように、歴史も立場や視点が変われば別のものになってしまうこともあります。ある人々にとってのヒーローは、そのグループに対立する人々にとってはテロリストに過ぎないこともあります。ことパレスチナ・イスラエルの情報というと、どちらかの側に偏っていたり、あまりにもキナ臭いイメージが付きまとっていたりして、何が真実なのかがよくわからなくなります。もっともそれは視点が違うというだけで、どちらも真実なのでしょうが……。

私たちはバスでエルサレムから死海、ガリラヤ湖周辺をまわり、テルアビブへと向かいましたが、イスラエル側にいる間、ヤクブ君は少しためらいを感じ、恐れてさえているようでした。西岸地区からイスラエル側に入るときのチェック・ポイントでもそうでした。テルアビブに着いたときもそうでした。その日は金曜日に当たり、泊まったホテルでも、夕刻からシャバット(ユダヤ教の安息日)のために、何人かのユダヤ人が食堂で食事をしていましたが、彼は少し居心地が悪そうでした。テルアビブで、日本人高校生たちがイスラエルの高校生家庭にホームステイをしたのですが、その晩、彼はみんなと一緒に出かけませんでした。少しためらったようです。もっとも次の夜は一緒に出かける機会がもてましたが……。

ここに書いたようなことは、彼にとっては、私たちと一緒にできなかったことでしょうし、私たちも彼がいなければ、イスラエルとパレスチナの間にあるこのような距離を知ることはできなかったでしょう。この旅で得たものはまだまだありますが、紙面の関係でこれくらいにしておきます。



あらためて、今回の旅はいったいどのような意味があるのかと、もし問われるならば、答えに窮してしまいます。ヤクブ君のことにしても、多くのすばらしい人との出会いにしてもそうですが、すぐに何らかのよい結果が得られるというものでもありません。去年の5月にプロジェクトのための事前合宿をした時に日本人高校生たちが描いた絵のように、参加者全員の中に何かの問いかけを残したのではないかと私は思います。私はこの旅を終えるとすぐにまた、もとの少しせわしない日本の社会の中の生活へと戻ってきました。そして少しずつこの旅のことも忘れていくでしょう。しかし多くの疑問と、もどかしい思いが私の中に残りました。

無力感と距離感を感じるばかりでしたが、今回の旅をこれだけに終わらせたくないと思い始めています。この経験がこれからどのような方向へと私の歩みを進ませるかわかりませんし、どんな形でこのプロジェクトに協力できるかもわかりませんが、また近い将来、私の好きなこの聖なる土地へ行きたいものです。あらためてそのような思いが募ってきました。これからも私は無力のままだと思いますが、それでもあの土地の人々が、先ずは紛争のない平和な日々を送れることを望んでいます。

テルアビブから飛行機が飛び立つ時に、「また絶対に来るからね。」と念じながら眼下に広がる景色を見ていました。思わず涙が出そうになりました。いつかその日が来るでしょう。

旅を終えて、一カ月以上経ってしまった。旅の間は、毎日が新しい出会いの連続だった。さまざまな出会いを自分の中で整理するだけで精一杯だったが、帰ってからはそれらの出会いが自分にとってどんな意義があったのか、振り返りながらいろいろなことを考えている。

テルアビブに着いてまず出迎えてくれたのは、イスラエル・パレスチナ高校生と大人たち何人かとその家族だった。みな温かく私たちを歓迎してくれた。出迎えのバスに乗ってからも、小さい子どももなつこく話しかけてくれ、私たちの緊張や旅の疲れも吹き飛んだ。

翌日からは早速交流となった。昨年の夏日本を訪れたパレスチナの高校生たち（テディとヤクープ）は、プロジェクトの後、自分がどのように変わったかを話してくれた。他国の文化に興味を持ったり、イスラエルの高校生とも親しくなったり、新しい世界が開かれたようであった。彼らと共にエルサレムの旧市街を巡り、西の壁に行ったが、近くに住んでいるのに今まで一度も訪れたことがなかったという。私たちには信じがたい事実だった。外国人と一緒にでなければ特別な場所には入りにくいのだ。彼らの生活そのものが「不自由さ」の上に成り立っていることを目の当たりにした。同時に何か納得いかない、もやもやした怒りのようなものが込み上げてきた。

翌日の交流会では、イスラエル・パレスチナの高校生とその家族が大勢集まり、にぎやかな感じで始まった。家族も、子どもたちが昨年のプロジェクトを通して成長している姿を大いに喜んでいるようであった。しかしこと政治的な話になるとやはり意見の相違がはっきりとあり、お互いの意見がぶつかり、私たち日本人には理解できない領域であることが分かった。イスラエル側はハマスについて相当な脅威を感じているようで、テロ集団には変わりないときっぱり言う。パレスチナ側は今までの汚職にまみれていたファタハにはうんざりしていたので、新しいハマスの政権に期待しているようだ。「テロ」



岩田 可愛

横浜：小学校教諭（音楽）
同行スタッフ

という彼らの間に立ちただかる「壁」は、そう簡単には崩れそうもないと思った。本当に戦うことでしでしょうか、この国は存在し得ないのだろうか。

後半では「ペアレント・サークル（遺族の会）」の話聞く機会を得た。イスラエル側のラミ氏はユダヤ人でグラフィック・デザイナーである。8年前エルサレムで起こった自爆攻撃によって14才の娘を亡くした。一方のミスク氏はパレスチナ側で、医者である。自分の父をイスラエル兵士によって殺されている。彼は病院で多くのユダヤ人を治療する立場におり、大変苦しまれたそうだ。二人ともはじめは復讐によってこの耐え難い苦しみ、悲しみを鎮めようとしたが、この「遺族の会」に出会って、「対話とゆるし」こそが、本当の平和をめざすためにもっとも大事なことで理解するに至ったそうである。この「遺族の会」が素晴らしいのは、イスラエル・

パレスチナ両方の遺族が一つの会を運営しているところだ。苦しみを、

お互いの溝を埋める大きな力に変えたのである。互いに尊敬し合い、尊厳を持って話すこと、それなしでは本当の平和は訪れないという信念のもと、学校での講演活動、献血活動など、さまざまな活動を通し「平和のメッセンジャー」として平和の尊さを訴えている。初めは批判や蔑みも多く、苦労したそうだが、活動は次第に大きな広がりを見せているようだ。私はこの話を聞いて、彼らが何かに突き動かされるようにして取り組んでいるこの活動を、奇跡としか思えなかった。人間が自分の受けた悲惨な経験から何を学び、その後の人生をどう過ごすのか。人間の一番尊い姿を見た気がした。同時に「人間はいつたい何のために争いをしているのだろうか」と、再び頭の中が混沌としてきた。

5日目、私たちはベツレヘムに向かった。その日の朝はなんとなく落ち着かず、早く訪れたいという好奇心と、疲れではない何か重い感覚があった。ベツレヘムは今「分離の壁」に囲まれつつあるという情報だけはあったが、実際それがどんなものなのか、どんな意味があるのか、自分の目で確かめたいという興味はある。しかしやはり目に見えない恐怖や緊張もあった。シェルート（乗合タクシー）に乗っ

「平和を願う 対話の旅」を終えて

岩田 可愛

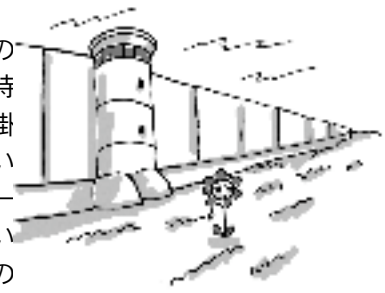
同行スタッフ

て移動中、武器を持った兵士を見かけたり、崩壊した建物が見えると、やはりただごとでない空気を感ずる。チェックポイントは、私から見るとあきれるほど大がかりで細工じみた建物のように見えた。ここを通らなければならぬパレスチナの人々は、その度に何を感じながら通行しているのだろうか。屈辱感なのか、それともやり場のない怒りなのか。人として認められないという心の苦しみは、物質的な貧しさよりももっと苦しい。それをどう処理しているのだろう。私たちを陽気に、明るく案内してくれたデディは、毎日ここをどんな気持ちで通行するのだろう。私は、もし自分がその立場に置かれたら何を思うか、想像すらつかなかった。不自由が日常化している現実を、ここでも見せつけられた。分離の壁は見るからに無機質で、周りのオリーブ畑の素晴らしい景色とは明らかに釣り合いがとれず、不自然だった。まさに異様以外の何ものでもない。人が造り上げた血の通わない建造物。だが人々の生活に着実に、もう当たり前に入り込み、根をおろしている。

ベツレヘムではマリアンのお父様の話を聞いた。数年前に最愛の娘を殺され、自身も体に弾丸を受け、生死をさまよった経験をお持ちである。お母様の胸には亡くなった娘クリスティーナの写真が掛けられ、いつも共にいるようだった。お二方ともまだ傷の癒えない体、心でいらっしゃるのに、私たちを温かく招いてくださった。一家はギリシャ正教のクリスチャンである。怒りや悲しみに暮れていたとき、キリストが亡くなる前に十字架の上で叫んだ「父よ、この人たちをゆるしてください。この人たちは自分が何をしているのか、わからないのです」という言葉を思い返したそうである。仕返しをせず、罰を与えず、間違っていることを相手に教えること。「この体験を忘れることはできないが、ゆるすことはできる」。お父様の口からこの言葉を聞いたとき、私はまず驚き、そして人間の限りない尊さに再び感動した。「汝の敵を愛せよ」。実際にこの意味が分かっている人がどれだけいるだろうか。そして実践できる人がどれほどいるのだろう。これほどの経験をしていなくても、私たちは日々些細なことで相手を憎み、傷つき傷つけられている。なぜ心からゆるせないのだろう。自分の利益、主義主張に縛られながらいつも自分を守る、愛することに執着してしまう。これが国家規模になると、国と国との意地の張り合い、偏った愛国心、そして醜い争いにつながるのではないか。国家を形成しているのは、紛れもなく人間であるのだから、一人ひとりが平和をつくるために何をすべきか個人の認識、決断にゆだねられている。相手を憎む前に、自分の心を振り返り、いさかいの種はどこにあるのか、本当は何なのかをはっきりさせる、自問することが大事だ。「分離の壁を造らずに、平和の橋をかけたい」「平和をつくる苦労は戦い争う苦しみよりずっと、いい」と語るマリアンのお父様の話を、もっと多くの人に聞いてもらいたいと思った。そして苦しい体験をなさったこの方の話の中に、平和への鍵が隠されているような気がした。

9日目、わたしたちはナザレの学校を訪問した。教育レベルの高い学校で、アラブ系の子どもが多く通うが、ユダヤ人の学校と長年交流し、互いのホームステイもしているという。多くの民族、宗教が交じり合っている生活環境のなかで大事なことは、「コミュニケーション……心の一致」であるとシュファニ校長は言われた。相手を怖がらずに共に、一緒に、共生していくことを探らなければ、本当の平和はつけない。この学校は、教育の現場でこの方法を模索しながら、平和に向けて一歩ずつ歩んでいる。人間を育てるのは志ある教育のみだと思う。子どもたちはみな人なつこく、瞳がきらきら輝いていた。子どもたち一人ひとりから、この学校の志がはっきり見て取れる気がした。

旅を続けながら、この国は本当に平和に飢えていると何度も思った。日常の当たり前の平和な時が、いつも何かに脅かされている。不自由であることが日常なんて、私たちには環境が違いすぎて、自分に置換えて考えられない。また日本人は平和という言葉をあまりにも軽く扱っている気もする。平和とは、人間が尊厳ある一個人として扱われ、安全に生活できたとき初めて感じられるものだと思う。同時に、平和は私たち人間の手でしかつけない。国を超え、宗教を超え、地球に共に住む共同体として、未来を見つめながら、「平和」という同じ方向に人間の勇気や知恵を集め、進んでいきたいと強く思った。



フォトアルバム

「平和を願う対話の旅」
若者たちのすばらしい
対話と交流の日々でした。



テルアビブ：イスラエル・パレスチナの懐かしい友だちとの対話と交流：両親も含め、50人以上が集まった。



左・死海で楽しむ理沙・葉子・
ヤクープ・朝香（左から）

下・ヤクープとホームステイ家族イレネと
その娘ミルナ
この家族の敷地に分離の壁が通っている。



下・「平和の対話」をしたナザレの高校生と
日本人高校生・スタッフ



上：デヘイシャ難民キャンプの
子どもたち

